

ヴェルサイユ宮殿にはいわゆるトイレはなかった

マリー・アントワネットとフランス革命

光 藤 俊 夫

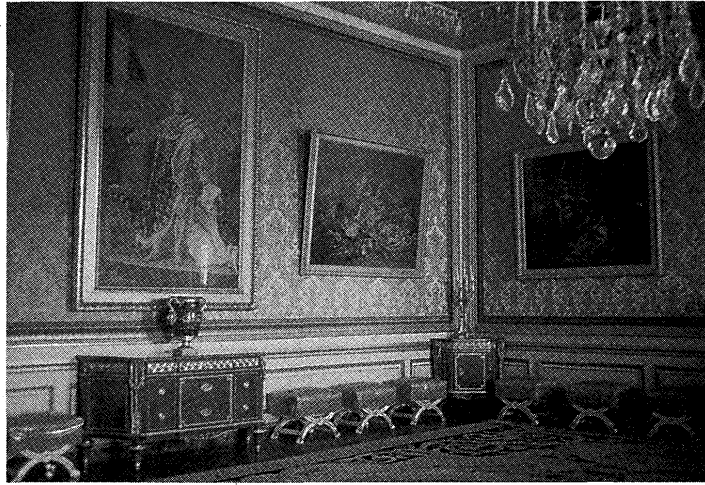
エマニュエル・ベアールが主演したフランス映画『マリー・アントワネット』(カロリーヌ・ユベール監督/1989)で、アントワネットが仮面舞踏会に出掛けるのに着替えるのを侍女たちに手伝わせながら、ついでに“用を足す”場面がある。「今夜はコルセットなしで行くわ」とかなんとか言いながら、「便器は?」と侍女の一人に尋ね、寝室に設けられている物置から^{しゅびん}溲瓶が座の下に収められている椅子を持ってこさせる。この場合の物置のことをトワレ(トイレット=化粧室)と呼んでいたのが、今日の便所の名の元の意だ。いずれにしても、当時の記録や資料に基づいての再現ではあろうが、それで鼻唄など歌ったりしながらその様子には、結構信憑性があり、下世話な言い方ながら、演じる女優さんが美女であるのも手伝って、観ていて、甚だ興味あるシーンではあった。

“便所”については、前に出した拙著『すまいの火と水』(共著 彰国社 1984)で書いたことだが、一般のすまいのインテリアにそれが設けられていなかった時代が、洋の東西を問わず長くあったのだ。ヴェルサイユ宮殿でも(実は“簡易”な水洗便所はあったと言うが、それは古代ギリシャやローマにもあった程度のもので、用足しの後、水で流せる溝が刻んであった、粗末な石畳の間[間と言えるかどうか]くらいの場所だったのだろう)、当初は便所などはなかったくらいだから、すでにして大都市への成長が約束されつつあったにもかかわらず、パリやロンドンでもしかるべき辻などに共同肥溜めはあったものの、室内では溲瓶を用いるのが普通で、それを「共同肥溜め」に持って行って捨てるという習わしであった。しかし夜間ともなると、上階に住む人たちは、それを「辻」にまで捨てに出るのは厄介至極、それで十八世紀に至るまで(と言うのは下水道が完備され、室内に便所がしつらえられるようになるまで)の市中の道路は、「ギャ

ルデ・ロー(水にご用心!)」の掛け声と一緒に窓から放出される糞尿で汚され、常に悪臭紛々だったと言う。ついでのことながら、「ハイヒール」の流行は、女性たちの衣服の裾を、そんな道路で汚さないよう計られたその頃の発明だったと言う説があるが、果たして本当かどうか。

さて、ベルギーの作家ジャン＝クロード・ボローニュが「フランス人はしばしば穴あき椅子に座っている最中に会話や、読書、あるいはトランプのゲームをやりたいという欲求に駆られ、ルイ十四世やジャン＝ジャック・ルソーはそうやって三十分も、時には何時間も過ごした」と書いている『羞恥の歴史』(ジャン＝クロード・ボローニュ著 大矢タカヤス訳 筑摩書房 1994)での「穴あき椅子」とは、前述のように溲瓶が座の下に隠されている椅子のことだが、ことほど左様にそれを使用するのに人前を憚らないものなら、他の家具同様の扱いで、それがより華やかに彩られることになるのは道理だ。事実、フランスルイ王朝時代には、金銀細工や象牙、真珠貝や宝石などがあしらわれていた絢爛たる代物が、宮廷や豪邸でのことながら、種々と妍を競っていたのだ。そして用が足されると、座の下の溲瓶を召使が取り出し、裏の森の奥などに捨てに行くのである。そう言えば、芥川龍之介の短編『好色』にも金蒔絵が施された“糞笥(まりばこ)”——つまりは日本の平安時代における宮中での溲瓶(オマルは糞笥の俗称)のことが出て来、それを侍女が捧げ持ち、いずこかへ捨てに行く場面が書かれてあるが、「侍従の局」の十二単(じゅうにひとえ)の陰で重宝されたそれと同じく、ヴェルサイユの姫君たちの衣裳、パニエ・ドゥブルに覆われての「穴あき椅子=溲瓶入りの椅子」もまた、まさに芸術品と言えるものであったのだ。

ところで、オーストリアの女帝マリア・テレジアの王女マリー・アントワネットが後にルイ十六世となる十五世の



ヴェルサイユ宮殿 マリー・アントワネットの寝室の一部 (1987年 筆者撮影)

孫に興入れしたのは14歳(1770)の時だったが、その頃のフランスはインドとアメリカの植民地をイギリスに奪われたお返しに、1775年にアメリカの独立戦争に参戦しイギリスに対抗、そのために莫大な戦費の支出となり、国の財政は危機に瀕していた。そして、相変わらぬ宮廷貴族の無秩序極まる横暴と共に、一般市民への税の厳しい取立ても平行し、食糧の確保もままならない状況に喘いでいた。

映画では、そして慣れない異国の王妃としてのつましさをなぞ微塵も見せず、故国の女帝からの忠告もあらばこそこの放漫ぶりで、根っからの浪費癖や遊興好きを精一杯に楽しむアントワネットの姿態が絢爛と描かれている。もちろん政治的には無能で無気力な、ルイ十五世亡き後の王であるところの亭主をそっち除けに、若い恋人をつくったりして、その不倫行為も実に堂々と開けっぴろげだ。ヴェルサイユ宮殿の諸々の情景―、たとえば、国王一家と貴族たちとの宴会の情景や特別にしつらえられた王宮内の劇場での王子・王女・侍従らも交えての「お芝居遊び」やら、あるいはアントワネットを貴族夫人らが囲んでの、宝石その他装身具などを賭けた賭博風景などで、当時の王侯貴族たちがどのように快楽に遊び、どんな風にはずんでいたのか、いろいろと垣間みることができる。先のアントワネットと「穴あき椅子」のシーンと同じく、もう一つ「興味ある」シーンとして、ルイ十六世がヴェルサイユ宮殿の屋根の上から、望遠鏡でヴェルサイユの街景を眺めて退屈を紛らわせる場面があるのだが、案の定ヴェルサイユ宮殿の屋根は

木造で、しかも銅板の瓦棒葺きであることが映し出される。前々から予想はしていたものの、その通りであったのが確認出来るのもありがたい。

この頃のパリとロンドンの二都を結んで描かれた物語が、映画化もされたイギリスの文豪チャールズ・ディケンズ(1812~70)の歴史小説『二都物語』(ジャック・コンウェイ監督/1935)だ。「1780年頃のパリは、何かと酷い状態だった」という断りが最初にあって、常に横暴な宮廷貴族たちの生態が様々なかたちで披露される中、貴族即王党派対王党打倒即革命派の対立が顕著になっていく。つまりは、市民たちの間にアンシャン・レージュム(旧体制、つまり絶対王政のあり方や古い土地制度、あるいは身分制度、また参政権や課税法に対して見直しを必要とする動きがよいよ盛んとなり、ここに三部会が招集されることになる。

「フランス革命」のことを知っているなら、この会の性格がどのようなものなのかは説明の要はないと思うが、簡単にその概略を述べておくとしよう。アンシャン・レージュムに寄生して大土地を所有し、農民への支配と様々な搾取でその存在を誇示している特権階級のうち、聖職者などを第一身分とすれば、フランスの耕地の三分の一乃至五分の二を支配している貴族階級のことを第二身分と言い、その他の、当時のフランス全人口2300万~2500万の大半を占め、政治的には発言権はなく、経済的には税金や年貢で酷い圧迫を受けていた、農民や市民たちのことを第三身分としているのだが、その身分別によって選出された代表議員

たちによって、新しい国家制度を決める審議権を持つ、身分制議会のことを指す。だが、やがて第一身分および第二身分代表と第三身分代表の軋轢から、第三身分代表は三部会から分離し、1789年6月、別に「国民議会」を結成することになる。

まさに同年7月14日のパリ市民たちによるバスチュー監獄（ここは今日、革命広場ということになっているが、もちろん監獄や断頭台もあるはずもなく、新しいオペラ座が建っている）襲撃の一ヶ月前のことだ。パリからヴェルサイユのルイ十六世の下に伝令が駆ける。ルイ十六世はベッドから叩き起こされる。「バスチュー監獄が襲われ看守長が殺されました」「なに！ 暴動か？」「いいえ、革命です」。その前に薄明かりの中にシルエットで浮かぶバスチューの監獄が市民たちの手によって襲撃されるシーンが展開されていて、そして10月、パリからヴェルサイユまでおよそ西に14キロ、主婦たちを中心にパリの市民たちが「パンをよこせ」の進行をする様や、王政の崩壊を願って氣勢を上げる光景もすさまじく描写されるのだが、この時ルイ十六世はヴェルサイユからパリに引き戻され、国王一家はひとまずチュイルリー宮に入る。やがて「国民議会」の中で同じジャコバン派に属し、共に革命を推進してきた同志でありながら、サン・キュロット（貧困市民層）の要請を受け入れ、王政打倒と貴族たちの絶滅を計る恐怖政治を推進しようとするリーダー格のロベスピエールと、急進的ではあっても穏健派と言えたダントンの、革命の中心となっていた二人の間に亀裂が生じ、葛藤と苦悩が始まる。このあたりの極めて複雑な模様は、ポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督による、仏・ポーランド合作映画『ダントン』（1982）に詳しい。

そう言えば、この映画で、フランスの新古典主義の創始者と言える画家ルイ・ダヴィッドと、そのアトリエが出てくる場面に大変興味を引かれた。ロベスピエールがダヴィッドのことを“ダヴィ”と呼んでいる光景が、この二人が日頃から親しい関係であることを教えてくれる。そして、アトリエにロベスピエールやダントン（ジェラルド・パルデュー）と同じ考えの革命家であり、反革命派と言えるジロンド系（王党派）の女性シャルロット・コルディに浴室で暗殺されたマラーの、その時の様子を描いた絵がもうすぐ出来上がるといった様子で画板の上に置かれていたり、またどこかの壁画の為でもあるのだろうか、壁に大きな下

絵が見え、傍らにヌードの男女が控えていたりするのだが、どうやらダヴィッドも、革命派の一人として活動していたらしいと言うのがとてもよく分かる雰囲気、巧みに構成されたシーンだった。

“フランス革命”を軸にしてのこれら三本の映画のそれぞれの結末を簡単に記しておく。『マリー・アントワネット』は、アントワネットがギロチンにかけられる為、長い髪の毛を首筋の後ろの部分で短く切れ、幽閉されていたコンシェルジュリの牢屋から連れ出されて行くところで終わる。『二都物語』では、弁護士のシドニー・カートンが、愛する女性の為に、その女性の連れあいである元貴族がギロチンにかけられようとするところを身替わりとなり、断頭台に昇って行くところで幕となる。ちなみに、その二人とも、首がぱっきりという場面は映されない。そこへいくと、『ダントン』の場合のギロチン（フランス人医師ギョタンが発明したのでこの名がある。ギロチンとなまった言い方になっているが、ギロチンと言えば、当時の恐怖政治のシンボルであった。）の映し出され方は、他のどれよりも残酷さが滲み出ているもの凄まじい迫力だった。王党派、旧貴族、悪徳商人等々が次から次へとギロチンにかかって、断頭台は血まみれになる。もう観ている方にも、その血生臭さがぶんぶんただよって来そうな酷さ、さすがアンジェイ・ワイダだと、そのリアリスティックな撮影手法に、ただただ唸らされるばかりだった。とにかく、これまたダントンのギロチン場面はないものの、言葉にもならない無残な雰囲気の中でFINとなる。いずれにしても、どれも十八世紀後半におけるフランス、特にそのパリの街景や、当時の風俗が実によく活写されていて、観ている方も、さながら当時のパリの街に住んでいる一市民と錯覚するくらいの臨場感に包まれてしまうほどに、ロケもセットも見事だった。

なお、『二都物語』には、別にジェームス・ウイルビーが主演した三時間半もの英・仏合作のカラーの長編（フィリップ・モニエ監督/1989）があるということと、「フランス革命」に関しての映画は沢山あるのだが、トーカー始まって直ぐ、と言っていいほど古いもので、モノクロながら名画の一本と言える作品、『ラ・マルセイエーズ』（ジャン・ルノワール監督/1937）があることも付け加えておきたい。そしてこの『ラ・マルセイエーズ』にも、冒頭にパリからの伝令とルイとの、例の「バスチュー監獄が襲撃されました」「なに！ 暴動か？」「いいえ、革命です」と言うセリ

フがやりとりされるのだが、どうやらこの「やりとり」は、歴史的に大きな意味を持ってしまったようで、今に至るまで、「フランス革命」を演じたり語ったりする時には欠かせない場面のようなものである。

さて、「フランス革命」の後には、当然のことながら『ナポレオン』ということになる。これは、一番オーソドックスなものとしてサッシャ・ギトリ監督の『ナポレオン』（1955/主役のナポレオン＝前半ダニエル・ジュラン、後半レイモン・ベルグラン）を挙げておこう。何しろ、当時のフランスの名優たちがこぞって出演しているのだから、それぞれ脇役ながら、なかなかにはまり所の役柄を演じていて、興味津々だ。（皇后ジョゼフィーヌ＝ミシェル・モルガン/二度目の皇后＝ダニー・ロバン/艶福家のナポレオンの何人もの愛人の一人エレーノール・デニエル夫人＝ダニエル・ダリュウ/フランス軍の元帥＝ジャン・ギャバン他、イヴ・モンタンやマリア・シェルなど）「ナポレオン」のことを子細にとはいかなくても、およそのことを知らない人はいないだろう。映画では、回想場面での彼の幼年時代を含め、イタリア遠征あるいはエジプト遠征などを果し、また数々の戦線で勝利を収め、やがてフランス皇帝となるまでを前半とし、その後フランス産業の拡大を目指しながらも、いわゆる「ナポレオン戦争」

を続行するのだが、イギリス産業の打倒とモスクワへの遠征を企てるもいずれも失敗に終わって退位、そしてエルバ島への流刑などが描かれる後半と、いわば一代記だから、大型の娯楽映画だと言えよう。

また、当時のフランス、そしてパリの建築やインテリアでの、ダヴィッドが創案したとも言える、ことにインテリアの、あるいは当時の軍人の衣装や市民たちの風俗等に、いわゆる「アンピール」様式が再現されている様子をじっくりと観察出来ることも一興だ。そして、ダヴィッドが描いて有名な「皇帝ナポレオンの戴冠式」が“動く”人たちが構成されている様子が何と言っても華やかで、圧巻的な見どころと言えるだろう。

最後、エルバ島から脱出したナポレオンは百日天下を取り、ロシア・プロシアとワテルローで一戦を交えるが敗退、再びセントヘレナ島に流刑され、そこで亡くなる。その最期にあたり、新しいフランスの総裁（オーソン・ウェルズ）とその側近（ジャン・マレー）とが、ナポレオンの墓石に何と刻むかを相談するシーンがあって、これがまた面白い。結局、墓石には名も経歴も刻まれず、まったく“白い”ままで設置されるのだった。



ダヴィッド『皇帝ナポレオン一世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠式』（1805～7年）

（みつふじ としお 本学名誉教授）